

唐伝奇入門

吳志達 著

日中出版



原書 唐人伝奇——中国古典文学基本知識叢書
著書 呉志達（ごしたつ）
原出版社 上海古籍出版社

訳者 赤井益久（あかい ますひさ）
國學院大學文学部専任講師
著書「中国文学の世界」（共著，笠間書院）

唐伝奇入門 中国古典入門叢書 IX

1985年6月10日 第1刷© <検印廃止>

定価はカバーに表示してあります。

訳者	赤井益久
発行者	柳瀬宣久

発行所 株式会社 日 中 出 版
東京都千代田区西神田1丁目3番6号 三崎町ビル
振替 東京5-186748 電話 03 (292) 8720・8721

編集・校正 篠崎泰彦
本文印刷 東銀座印刷出版株式会社
カバー印刷 (株)ケイ・エム・エス

ISBN4-8175-1133-8 C1098

唐傳奇入門

吳志達著

赤井益久訳

日中出版

目次

凡例

第一章 唐伝奇の名称と源流

- (一) 伝奇の名称と由来 7 / (二) 志怪小説の影響
(三) 史伝文学とのかかわり 12 / (四) 「小説は唐代に至り一変した」 17

第二章 伝奇勃興の理由

- (一) 伝奇の創作を促した政治経済の基盤 23
(二) 社会思潮・文化芸術との関係 29 / (三) 科擧の影響 33

第三章 伝奇の発展

- (一) 志怪小説から伝奇小説へ 37
(二) 伝奇小説の黄金時代 44 / (三) 伝奇の発展と衰微 56

第四章 婚姻制度への批判

61

第五章 伝奇に見る政治的対立

- (一) 《霍小玉伝》——妓女のなみだ
 - (二) 《鶯々伝》——佳人のなげき
 - (三) 《李娃伝》——愛の凱歌
- 81

第六章 伝奇に描かれた中晩唐の社会

- (一) 《枕中記》 《南柯太守伝》に見る対立
 - (二) 《周秦行紀》 《上清伝》に見る党争
- 95

第七章 為政者への諷刺

- (一) 《紅線伝》——藩鎮の対立
 - (二) 《虬髯客伝》——時代の特徴と社会的意義
 - (三) 《昆崙奴》 《聶隱娘》 その他
- 105
- (一) 《東城老父伝》 《長恨歌伝》——暗君への諷諭
 - (二) 《開河記》 《迷楼記》 《海山記》——暴君への批判
- 112

第八章 伝奇の芸術的成果 133

- (一) 創作における基本的な傾向 133 / (二) ゆきとどいた構成 142
(三) いきいきとした人物描写 150 / (四) 警拔で魅力的な言辞 159

第九章 文学史に占める伝奇の地位 176

- (一) 伝奇の地位 176 / (二) 後世文学への影響 179
(三) 伝奇の研究概況 189

後記

訳者あとがき

凡 例

一、本書は、中国古典文学基本知識叢書に収められる呉志達著『唐人伝奇』（上海古籍出版社、一九八一年三月）の全訳である。翻訳にあたって書名を『唐伝奇入門』と改めた。

一、本書中、しばしば時代区分として「初唐」「盛唐」などの語が用いられている。通説ではおおむね初唐（六一八～七一二）、建国より玄宗即位まで約百年）、盛唐（七一三～七六二、玄宗の即位より肅宗の死まで約五十年）、中唐（七六三～八四〇、代宗初年から武宗初年まで約八十年）、晩唐（八四〇～九〇七、武宗初年から唐滅亡まで約七十年）であり、読者におかれては一応の目安としてお読みいただければ幸いである。

一、原著中、「伝奇」を唐伝奇・伝奇小説・唐人伝奇などと呼んでいる。訳書では、出来る限り原著に従ったが、「伝奇」と略した所も若干ある。

一、本書中、伝奇作者・登場人物を言い「○○の人」とあるのは、本籍地を指すのが通例で、必ずしも居住地を意味しない。

一、引用古典の文章・詩歌は、原著中には原文が示されるだけで現代語訳は付されていない。翻訳にあたっては、書き下しを原則とし、本文との関係上必要と思われるものは、適宜口語訳・訳注を（ ）に入れて補った。しかし、それも繁雑をさけ、簡便・平易を心掛けた。

一、原著の注は各頁下欄に施されているが、本書では各章の末尾に一括してあげ、その際に、出典や語釈など本文に組み入れた方が読み易いと思われるものは（＝）に入れて示した。

第一章 唐伝奇の名称と源流

一 “伝奇”の名称と由来

一般に中国文学史の上で、唐代の人々によって書かれた短篇の文言小説を“伝奇”と呼んでいる。“伝奇”という名称を使つたものとも早い例は、中晩唐期の作家裴鉤で、小説を“伝奇”と称している。しかし、これは裴鉤の命名ではなくて、人々がこの種の小説が多く奇妙で、かわつた内容をもつのを特色としてゐることから、こう呼んだものであつた。元稹の《鶯々伝》は、《伝奇》と呼ばれていたのである。中唐以前、文壇は詩を尊び、長篇で委曲を尽くした虚構的構成や諧謔を内容とする小説の類は、正統的な文人の作るものではないとされ、伝奇は典雅な古文と区別されるための蔑称にすぎなかつた。だが實際は、唐代の代表的古文作家である韓愈・柳宗元も“伝奇体”の《毛穎伝》（韓愈）《河間婦伝》《段太尉逸事状》（柳宗元）などに筆をとっている。これらを「無実駁雑」（空想的でまとものない文）であると批判する声があ

ったが、韓愈は孔子をも「猶^なは戯^{たはむ}る所あり」と言つて平然とこれをかわし、諧謔性をおびた「駁雜の説」を作つても儒家の道を害したことはないならぬと考へていた。⁽¹⁾柳宗元は《毛穎伝》の周到な意図をほめ、批判に反論している。⁽²⁾

伝奇体の小説がさかんになるにつれて、「伝奇」の名は時代の趨勢となつて生まれたのである。裴鏘が自らの小説集に「伝奇」と名づけたのは、まさに伝奇が新たな文学様式として人々に受け入れられ、みとめられた証左なのである。北宋の古文家尹師魯^{いんしろう}は、友人の范仲淹^{はんちゆうえん}が作つた《岳陽樓記》を「伝奇体」であると言つてけなしている。⁽³⁾これは古文家の偏見であるにすぎない。ただ、次のようにこの間の事情を説明できるだろう。つまり中晩唐から北宋に至つて、この「伝奇」の名称は、もっぱら短篇の文言小説の形式を意味したからである。後世になるとさらに変化し、南宋と金では諸宮調^{しよきゆうてう}を伝奇と呼び、元人は雜劇^{ざつげき}を、明・清は南戲^{なんぎ}を伝奇と呼んだのである。同一の名称でありながら、時代を異にすると意味も相違するようになった。

唐伝奇は、詩とならび唐代文学の精華といえる。宋の洪邁^{こうまい}は「唐人小説、熟せざるべからず、小々たる情事、凄婉絶えんと欲す。洵に神遇して自ら知らざる者あり、詩律と与^{とも}に一代の奇と称すべし」(『容齋隨筆』)と言ひ、民国期の汪辟疆^{わうへききやう}は「唐代文学は、詩と小説がすぐれている」(『唐人小説』序)と言う。唐人伝奇がこうした著しい成果をみせるのは、社会・経済・政治・文化・芸術などの各方面の影響の他に、小説文学発展上の内的要因があつたからである。

二 志怪小説の影響

小説の源流をさかのぼると、当然神話や伝説と関連してくる。古籍中に神話や伝説が断片的にあっても、それを「小説」とは言わない。紀伝体の歴史書の体裁をとる『穆天子伝』は、ほぼ神話小説の要素をそなえ、物語のすじも整い、想像力もゆたかである。伝中に出てくる西王母の姿は、先行する『山海経』で描く半獣半人の怪物とは異なっており、詩歌の応酬をよくする感情こまやかな女仙として描かれている。これはのちの『漢武内伝』『漢武故事』『西王母伝』等の野史・雑伝に明らかに影響を与えている。

唐代伝奇の直接の源流は、六朝の志怪小説にある。六朝期には、神仙・方術・鬼怪・変異をとりあげる作品がきわめて多く、『山海経』や『穆天子伝』中の神話伝説をおおむね踏襲し、新たな社会の中でそれを発展させている。この他に『叢残小語』(断片的な些事をあつめる)の雑伝瑣記から発展し、人間の逸話や些事を記録する『志人小説』があり、伝奇に影響を及ぼしている。

志怪小説のあらすじはみな比較的簡単であるが、中には民間伝説や別伝の性質をおび、すじもやや複雑で構成もとのい、人物描写に意をはらうものもあった。こうした作品は浪漫的イメージにとみ、一部分については迫真の描写がみられ、文章表現も洗練されたものになってい

る。これらは伝奇のよい手本となった。

志怪小説の題材は、伝奇に大きな影響を及ぼしている。初唐の《補江總白猿伝》^{ほこうそうはくえん}は志怪的色彩が濃い。作品はこうである。梁の將軍歐陽紇^{おうようこつ}が南征の途中、美人の妻を突然猿につれ去られてしまう。紇は猿のすみかである巖窟を探し出し、多くの女性たちと力を合わせて猿を殺そうとするが、妻はすでに妊娠しており、猿に似た子を生む。この物語のあらすじは干宝の『搜神記』中の《猯国馬化》^きに似ている。その話は、その名を「猯国」あるいは「馬化」という猿のような怪物が住んでいた。美女が近くを通りかかるとさらって子を生ませ、男子を生むと母親と共に家に帰らせる。したがってその付近の人々の多くは猯国馬化の子孫であった、というものである。この二つの説話間の伝承関係ははっきりしていよう。初唐の張文成の《遊仙窟》の内容は、もとより南朝宋の劉義慶『幽明録』^{ゆうめいろく}の中の《劉晨阮肇遇仙》^{りゅうしんげんちやうぐせん}と同じではない。つまり、前者は「遊仙」といって美女のもとへ通うことを言い、後者は「遇仙」といって乱世にあった人々が仙境に入り込むことを描いている。だが題材と構成から言えば、両者に影響関係があったことは明らかである。

張文成の《遊仙窟》をみると、仙窟中の豪華な調度や山海の珍味をならべた宴席、杜十娘や五嫂との別離の場面が、劉晨・阮肇が仙女と遭遇した経緯とたいへんよく似ているのである。長篇と短篇、叙述の繁簡の差はあれ、大同小異なのである。伝奇の最盛期の作品《枕中記》^{しんちゅうき}《南柯太守伝》^{なんかしゆうでん}は、瞬時の夢の中で長い人生の栄枯盛衰を経験する話であり、こうした手法は「幽

明録』の《焦湖廟祝》に由来している。《離魂記》^{りこんぎ}は、倩娘^{せんじょう}が愛の幸福を求めて、肉体から離れた魂となって愛する王宙のもとへ奔る話であり、これはやはり同書《龐阿》^{ほうあ}の、石氏の女の魂が愛する龐阿のもとへ奔る構成をうけている。また、晩唐の皇甫氏の手になる『原化記』に収められる《呉堪》^{ごたん}は、田螺^{たにじ}から変身した女性が誠実な独身男呉堪のために家事を手伝う話であり、これは陶潜作と言われる『搜神後記』の《白水素女》の田螺精の物語を敷衍^{ふえん}させたものである。志怪小説中の人神交婚譚や異類婚姻譚に至っては、『搜神記』中の《天上玉女》《呉王小女》《阿紫》、『幽怪録』中の《劉晨阮肇遇仙》《黄原》等があつて、唐人伝奇への影響はより顕著である。これについてはのちにふれるので、ここではこれ以上述べない。

六朝の志人小説は、題材・テーマ、また幻想的な表現手法などの面で、志怪小説が与えたごとき直接的影響を伝奇に与えたようには見えない。しかし、人事を描く表現技法が貴重な歴史的体験として蓄積されていたのである。劉義慶の『世説新語』^{せせつしんご}を代表とする志人小説は、漢魏六朝の貴族社会に生きた人間の伝聞や逸話を記したものであり、どの話も短篇にして簡略であるが、非常に現実味があり、記事は生活のすみずみまで及び、表現技術もかなり高いものである。題材の面では志怪小説の範囲を超え、創作目的や手法の面では自己認識を強調するばかりでなく、文学の鑑賞や娯楽の目的にもかなうよう注意がはらわれている。『世説新語』のことは洗練されて含蓄にとみ、特定の環境に生活する人物のモデルをたくみに取り出し、個性的な会話・動作やこまごました生活を通して人物の性格を克明に描き出し、登場人物の容貌や風

采を彷彿とさせるのである。明の胡應麟こおうりんは『少室山房筆叢』の中で、「其の語言を読めば、晋人の面目氣韻、恍然として生動す。而して簡約玄淡（簡潔ではあるが奥深い趣がある）、真致窮きはまらず」と称賛している。この指摘は正しい。最後に挙げておきたいのは、楊銜之ようげんしの『洛陽伽藍らくやうがらん記』である。これは小説とは言えぬものだが、叙事的な散文であってその記事・形容・人物描写の点で生彩があり、唐伝奇の都市生活や寺院の風物・風俗描写に影響がみられる。

三 史伝文学とのかかわり

六朝時代の小説が唐伝奇に重要なはたらきをしたことはみとめるとしても、だがそれはようやくひとつの源流になったということにすぎず、ただちに芸術的完成度の高い唐人伝奇を生み出したとは言えないのである。とくに人物像のとらえ方の点では、典型描写に乏しく、大まかにあらずだけを述べる六朝小説は、伝奇が成功した典型的環境に生活する典型的人物像の描写には遠く及ばない。構成や人物描写の面では、明らかに史伝文学の伝統をうけついでいる。先秦・兩漢から六朝に至る史伝文学は小説とは言えないが、その人物の描き方、すじのはこび、場面の雰囲気きふきの伝え方などはすでに小説的とも言え、人を魅了するものがある。とりわけ、正史と小説の中間に介在する野史・雑伝の類は、人物描写は生き生きとして生彩があり、構成はきちんと整い、波瀾にとみ、唐人伝奇の発展に大きな影響を及ぼしている。戦乱描写を

得意とする『春秋左氏伝』は、とくに動乱の中にうごめく各種の人物を巧みに描き出しているし、『戦国策』は登場人物のこまかな所作や心の動きの表現にたけている。そして『史記』の列伝は、たくみなすじのはこびや的確な人物像に、小説的魅力があふれている。

宋初に編集された類書『太平広記』に所収される《豪俠》《雜伝記》の類の伝奇は、表現形式の上から『史記』など正史の列伝と非常によく似ている。列伝はおおむね物語性がよく、首尾一貫している。まず冒頭に主人公たるべき人物の出自家柄、日常、外見や容貌の特徴に至るまでを簡略に説明し、次に人物間の対立を描き、すじには曲折があつて、叙述には臨場感が漂う。そして末尾にはしばしば作者の論贊が付されて、執筆の意図が明らかにされる。いま、こころみに『史記』の《游侠列伝》と唐人伝奇《馮燕伝》とを簡単に比べてみよう。両者の影響関係をみとめることができるはずだ。《游侠列伝》中の郭解の部分は次のようにある。

郭解、軹くわくかい（河南省済源県）の人なり。字は翁伯。善く人を相する者（人相を觀る者）許負きよふの外孫なり。解の父任俠を以つて、孝文の時に誅死せらる。解の人となり短小精悍（背丈が低く勇敢）にして、酒を飲まず。少き時、陰賊（人を傷つけ物を損なう気持をもつ）なり。慨として意に快くせずして、身の殺す所甚だ衆し。軀を以つて交に借し（命がけで友を助ける）仇を報ず。命を蔵し（亡命の人をかくまう）、奸を作し、剽攻（追いはぎ）休まず。錢を鑄（にせ金を作る）、冢つかを掘る（盜掘）こと、固り勝あげて数ふべからず（数えきれぬほど多い）。

……解の年長ずるに及び、更に節を折り儉を為し（改心して儉約する）、徳を以って怨に報し、厚く施して薄く望む（他人へは恩恵を施し、見返りをのぞまぬ）。然れども、其の自ら喜びて俠を為すこと益々甚し。……

ここではまず郭解の身の上、風采、性格の特徴をのべ、そして不良の少年時代、長ずるに及んで前非を悔い改め、やがて有名な豪傑になったことが記されている。このあと具体的事件を通して彼の義俠的性格を表現し、最後に作者の郭解に対する人物評が付される。《馮燕伝》は基本的にはこうした文章の構成をかり、次のように言う。

馮燕なる者、魏の豪人なり。父祖、名を聞くことなし。燕少くして意気の任なるを以って専らにす。擊毬（ポロのような球技）闘鶏の戯を為す。魏市に財を争ひて闘ふ者あり。燕これを聞きて往き、博殺すれども平げず。遂に田間に沈匿す。官、捕ふること急なるも、遂に滑（州）に亡ぐ。益々滑の軍中の少年と鶏毬し相得たり。時に相国（宰相）の賈公耽、滑に在り、燕の材を能くし、中軍に留属せしむ。

右の文につづいて、馮燕が張嬰の妻と密通した経緯が述べられている。言うまでもなく、この話自体は取るに足りぬものだ。張嬰の妻が馮燕に媚を売り、すきをみて馮燕に夫を殺させよ

うと刀を手わたす、ところが馮燕は夫を殺さずに、逆に不貞の女房の方を手にかけてしまうところに面白味はある。これにより張嬰はぬれぎぬをきて、妻殺しの容疑で死罪を蒙る。まさに張嬰が生死の瀬戸際に立たされて折、「一人の排看する者来るあり、呼びて曰く『且く不幸（無実のもの）をして死すことなかれ。吾、其の妻を窃み、又これを殺せり、当に我を繋ぐべし』と。吏、自言する者を執ふれば、乃ち燕なり」と馮燕が自らの罪を名のり出る。これはまさしく生と死のぎりぎりの対立を通して、馮燕の豪俠的性格を表現している。つまり、作者が伝奇末尾に評をつけ「燕は不誼（不義）を殺し、不幸を白す、真に古豪なり」と言うのも、この性格を強調している。題材について言えば『史記』游俠列伝と伝奇『馮燕伝』は、現実の出来事に由来しているが、文学の伝承より見れば、伝奇は明らかに史伝の影響をうけているのである。

『史記』における人物像のデッサンの手法は、『左伝』や『戦国策』に比べて多様になり、登場人物はいっそう豊かな色彩をおびている。『項羽本紀』『信陵君列伝』『廉頗藺相如列伝』などの名篇は、みな人物の対立をそれぞれの発言や行動を通して描き出し、細部に至るまでの人物像の典型化を可能にしている。そして、登場人物の立場やそれぞれの言葉づかいに応じて描き分け、各人物像を活写し得た。歴史に忠実でなければならないという原則のもとで、人物描写に誇張がなくはないが、そうすることで人物像の本質をいっそうきわだたせているのである。作者はまたその場の空気を伝え、対比による印象づけなどの表現法を駆使し、各人物像の